

③耳取山遺跡群（見附市）

この耳取山一帯は、石器時代、縄文時代、弥生時代、平安時代からなる複合遺跡であり、なかには市の史跡に指定されているものもあった。1986年春に民間業者がこの丘陵一帯にゴルフ場を主体とする総合スポーツ・レクリエーションの基地開発を計画したため、あらためて同年8月から11月にかけて遺跡の分布および発掘調査が行われた。

その結果、新遺跡の発見が相次ぎ、それとともに類例の少ない遺構や遺物が検出された。そして太古から幾千年もの間、この丘陵に人々が住み続けたことをあらためて認識させた。

遺跡の保存運動は、地元の歴史研究4団体により展開され、それに一部の地権者の反対も加わって、87年の11月には業者側で開発計画の中止を宣言した。しかしその後も耳取山開発計画は、手を変え形を変え浮上してくる兆しを見せており、余談を許さない状況にある。

この遺跡の保存運動は、その後単なる遺跡の保存運動ではなく、郷土の自然環境と歴史的環境づくりへと目的を発展させ、88年4月には自然愛好者を含め「見附の自然と遺跡を守る会」を発会させる。このような保存運動を契

機に町づくりを展開しようとする試みは運動の理想でもあり、画期的なことである。なおこの会は現在も根強い運動を続けている。

遺跡は先人が残した文化遺産として貴重であることは誰しもが疑いなく思うであろう。しかしその反面、開発にとってみれば何かと規制を持たらず障害物であると思われ兼ねない。

開発も遺跡保存も人々の暮らしを豊かにするためのものという点で本来の目的は一致している。したがって、我々の生活にとっていずれも重要であり、どちらかを犠牲にしてもよいというものでもない。ただしここで注意してほしいのは、遺跡をはじめとする文化財は一度壊したら再生できないもの、代替性のないものであるということである。開発の場合も、人々の生活に必要な不可欠で、その価値は遺跡のそれを上回るものもあるだろうが、往々して場所の移動が可能なもの、代替性のあるものも見受けられ、なかには本当に人々の暮らしのにとって必要なものか疑問を抱かせるものもある。①籠峯遺跡の場合は、計画されているような巨大な溜池が本当に必要なのか、また代替性の可能性はないのか、といった疑問もあるし、②蒲ヶ沢遺跡群の場合もま

た土取りの代替地の可能性を秘めている。さらに③耳取山遺跡群の場合は、果たしてその地にゴルフ場が必要なのか、という素朴な疑問を抱かせる。真の開発とはこうした疑問や問題点を払拭してはじめて成立するのではないだろうか。

ここで開発側に求めることは、なんでもかんでもやみくもに開発するのではなく、それが及ぼす社会的な影響を考慮しつつ慎重な態度で臨んでほしいということである。

遺跡を含む文化財は再生不可能という重要性の他、その自然と一体となってそこに住む人々の生き方（文化性）を特色づける役割も果たしている。すなわちその地域性・文化性を作り出す要因になっているのである。したがって開発側は遺跡の持つ重要性を理解するとともに、保存側はそれに応える形で協力し、お互いが補強し合いながら人々が求める真の開発を推進していくことが肝要であろう。

遺跡と開発、この両者が調和しながら共存していくことこそ、地域づくり、快適な環境づくりにとって不可欠な要素なのではないだろうか。

（文化財保存全国協議会全国委員）

読書案内

『生態学 一概念と理論の歴史一』

ロバート・P・マッキントッシュ 著
大串隆之・井上 弘・曾田貞滋 訳
思索社 ¥5,800 (旧価)

僕が学生時代に勉強したのは、主に湖沼の植物相。大学院では福島潟の植物について調べた。それで、何かの発表会で僕がしゃべることになったら、新潟県内の湖沼の植物についてである。いつだったかの小さな発表会の時、やはり、福島潟の植物について話をした。質疑応答の時、湖沼の植物を守る、あるいは、復活させるのにはどうしたらよいのか、という質問が出た。こういう質問が出るであろうことは予想していたが、実は、こうしたことには触れられなかった。僕のやったことは、事実の記録と、そこからほんの情ないほどの傾向を導き出しただけなのだ。とても、そんな実際の要求に答えられるものではない。そんなことを期待する方が間違っている、とひそかに思う。それなら、お前のやったことは意味がないではないか。そうかもしれない。

生態学、実によく分からない分野だ。僕がやったこともその一部に入るかもしれない。試験管の中でゾウリムシがどのように殖えるのか、というようなことから、地球全体の環境についてまで。今やまた、生態学は脚光を浴びている。僕が勤める学校の生徒の中にも、将来、生態学を勉強したい、という者がいる。そうでなくとも、多くの生徒は環境問題に絡

めて、生態学に関心がある。しかし、生態学とは一体何を研究する学問なのであろうか。どうも捉えきれない。何でもかんでも、その中に放り込んでしまえそうなのだ。

表題に掲げた本は、生態学の歴史をまとめたものだ。しかし、僕は消化不良を起した。なにしろ、しっかりとした生態学の知識がない。それでも二つ、やはり、と思ったことがある。一つは、生態学はその歴史を通じて、農業や工業などへの実際的な応用と不可分の関係にあること。もう一つは、まだ何一つとして解決された生態学上の問題はないこと。実際に問題を解決しなくてはいけないにもかかわらず、解決できない。

生態学は何やらヌエのようだという印象を拭い去れなかったどころか、確信さえした。あまりにも大きすぎて、複雑で、いろいろなものが入り込んでいるため、正体が把握できない。こんな化物にはたして何が出来るのだろうか、と疑うと同時に、こんな化物だからこそ何とかしてくれる、という期待もある。この化物は自然全体を一度に把握したいという、人間の夢の権化かもしれない。カバーにある、『不思議の国のアリス』に出てくる猫の絵が、象徴的だ。

（笹川 通博）